令和3（2021）年度
高等学校における教科指導充実に関する調査研究
～資質・能力の育成を図る授業改善の推進～

問いは意図
～実践編～

国　語　科

Ⅰ．教材について

チンパンジーと人間を比較しながら、あるべき人間社会の在り方について述べた評論文。原始的な集団生活から、農耕の開始と言語使用を経て、人間の暴力が激化していった過程を示し、現代の課題への展望を述べるという、論理の展開が明瞭な文章である。

Ⅱ．単元のねらいと評価規準

ねらい

段落の働きや関係性を考え、筆者の主張がどのように展開されているかを捉えることを通して、文章を構造的に読む力を育成する。

評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
意味段落の働きや段落相互の関係を理解している。	「読むこと」において、それぞれの意味段落の働きに着目し、筆者の論理の展開のされ方を、文章で説明している。	論理の展開を説明する文章を書くことで、文章を構造的に理解し、相互評価を通して自らの学習を調整しようとしている。

Ⅲ．単元の指導計画(4時間)

時間	学習活動
1	・チンパンジーの戦いと人間の戦いとの違いを表に整理する。 ・家族の延長であった共同体が拡大し、戦争が激化していった過程を150字程度でまとめる。
2	・「言語の出現」が「ヴァーチャルな共同体の形成」につながる理由を理解する。 ・「土地の所有」が「中央集権的」構造を生じさせる過程を理解する。
3	・「死者につながる新しいアイデンティティー」とは、どのようなものかを理解する。 ・戦争や暴力の現状について整理し、それを克服するための筆者の提言をまとめる。
本時 4	・第1時～第3時の読解を踏まえ、各意味段落の内容をまとめ、各意味段落のはたらきを理解する。 ・筆者の論理の展開を整理し、筆者がどのように論を展開しているかを、自分の言葉で説明する文章を書く。 ・各自がまとめた文章について、評価基準に沿って、自己評価、他者による評価を行う。 ・本単元全体を振り返り、「学んだこと」、「さらに学びたいこと、身に付けたいこと」を挙げ、自らの学習を調整する。

Ⅳ. 授業実践

本実践までの取組

・本単元に入るまでに、五つの評論文を、「対比」「意味段落の要約」「段落の相互関係」に着目して読解し、構造的に読む力の育成を目指した。
・本単元においては、第１時から第３時において本文の読解を行った。本文を三つの意味段落に分け、それぞれの内容を、問いに沿って説明したり、箇条書きで書き出したりして、各意味段落の要旨を捉えさせた。学習プリントを用いて、生徒が自主的に学習に取り組めるようにした。

学習プリント ☞

本時の概要

前時までの授業を通して、生徒は文章の構成、展開、要旨を的確に捉えていると判断できる状況にある。本時は、文章全体を踏まえ、筆者の主張がどのように展開されているかを生徒自身の言葉で説明することにより、本文の論理性を評価する実践である。

展開①

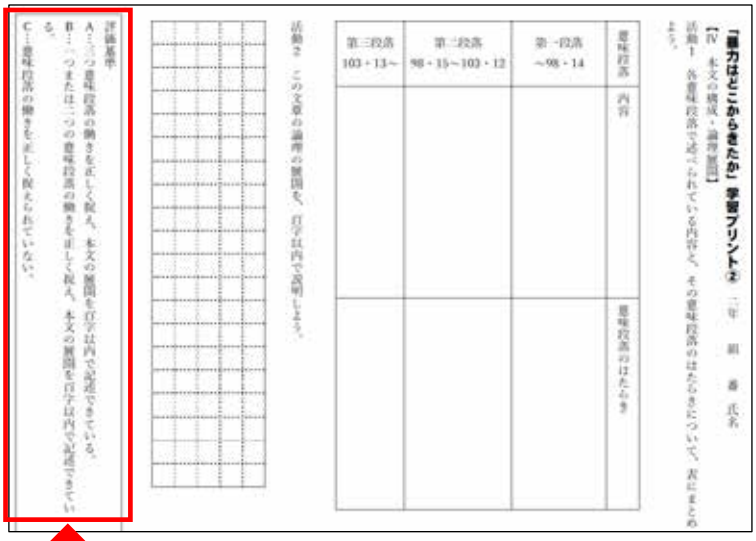
前時までの学習内容を踏まえ、各意味段落の内容とそのはたらきを表に整理する。

本単元の核となる、「筆者の論理の展開のされ方を説明する」という活動が円滑に行われる。

展開②

表を基に、筆者の主張がどのように展開されているかを、自分の言葉で説明する文章を書く。

問い　この文章の論理の展開を、100字以内で説明しよう。


「暴力はどこからきたか」学習プリント② 二年　組　番　氏名

【Ⅳ　本文の構成・論理展開】

活動１　各意味段落で述べられている内容を、その意味段落のはたらきについて、表にまとめよう。

意味段落	第一段落 ～98・14	第二段落 98・15～103・12	第三段落 103・13～
内容			
意味段落のはたらき			

活動２　この文章の論理の展開を、百字以内で説明しよう。

評価基準

A：三つの意味段落の働きを正しく捉え、本文の展開を百字以内で記述できている。

B：二つまたは三つの意味段落の働きを正しく捉え、本文の展開を百字以内で記述できている。

C：意味段落の働きを正しく捉えられていない。

評価基準を記載。生徒は評価基準を理解した上で、書く活動を行う。

【指導の工夫】
本文全体に関する「問い」は、構造的に読むという文章の「読み方」を学ぶ問いであり、主体的に読む態度を育成する。生徒は活動を通して、文章の読解をより深めるとともに、読解における自らの課題を見いだしていた。また、自分の言葉で説明することは、「言葉にこだわる」という国語科の見方・考え方を鍛える活動であり、論述する力の育成にもつながるものである。

【生徒の記述】
人間の戦争の特徴をまず述べ、本来の共同体の在り方に言及し、次の段階で戦争の苛烈化を指摘し、その原因を三つの視点から考察している。最後の段落で現代の暴力の特徴を提示し、筆者の視点で解決策を論じている。（本文の内容に触れながらまとめている例）

【生徒の記述】
第一段落は問題を提起し基礎知識を説明している。第二段落では、第一段落で提起した問題が起きている原因を詳しく説明し、第三段落で第一・第二段落をふまえて筆者の見解と解決策について述べている。（各段落の内容を一般化してまとめている例）

展開③

自己評価、他者評価を行う前に、各自が書いた文章について話し合う。

【指導の工夫】
日頃から、教師が問いの範例を示す前に、生徒同士で確認し合い、意見交換を行って、文章や考えを吟味することを重視している。生徒は、範例を待ったり、範例を暗記したりするのではなく、意見交換を通して自分の文章や考えを振り返る習慣を身に付けている。

振り返り1

展開②で示した基準に基づいて自己評価、他者評価を行う。

【指導の工夫】
評価基準を示した上で書く活動を行ったことにより、生徒は自分が書いた文章を段階的に評価し、自分の文章のよい点や課題を自覚的に捉えることができた。さらに、返却された学習プリントの自己評価と他者評価、教員評価を比較させることで、自分の文章を見直し、推敲できるようになった。

【生徒の様子】
授業後、教師による評価を行ったが、自己評価、他者評価、教員評価が一致しない生徒が一定数見られた。中でも自己評価が低い生徒が多く、評価することに慣れていない様子がうかがえた。計画的な単元の配列、複数の単元を超えた評価場面の設定など、工夫が必要である。

振り返り2

本単元の振り返りを行う。

生徒の学習の調整、主体的な学びを促す。

【生徒の記述】
・意味段落の役割を理解して文章を読むことで、文章の構成が捉えられ、筆者の主張が理解しやすくなった。
・この教材の読解や書く活動を通して、段落をまとめたり働きを考えたりすることで、本文の趣旨をつかむプロセスが理解できた。
・段落同士の関係に注目できるようにしたい。そのために接続詞をもっと意識できるようにしたい。
・対比の構造をつかむのが苦手なので、対比構造を捉えられるようにしたい。

〈本時のポイント～文章を構造的に読む力～〉

評論文の授業では、一部分の内容等を説明させる問いを立てがちである。しかし、必ずしも本文全体の読解に資するものにならないことがあり、生徒の立場からしても文章を読んだ実感に乏しい問いになってしまう。また、新学習指導要領「論理国語」の「読むこと」の領域の指導事項には、「文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にしながら要旨を把握すること」と示され、逐語的な読解だけでない、読みの力の育成が求められている。そこで、本実践では、本文の構成や論理展開に関わる問いを立てることにより、「何が述べられているか」だけでなく、「何がどのように述べられているか」を考えさせ、本文の趣旨を自らの言葉でまとめ直す活動を行うことで、文章を構造的に読む力の育成を目指した。

内容の理解→構成の理解→振り返りというプロセスをたどることで、生徒は文章の読み方を学び、さらに文章読解における自身の課題を見いだしていた。本実践は、ある程度まとまりのある文章の大意をつかむといった大きな読みの力の育成とともに、主体的に文章を読む態度の育成にもつながると考える。

Ⅴ. 学習評価の工夫　思考・判断・表現

本時の目標：本文全体を踏まえ、筆者がどのように自らの主張を展開しているかを文章で説明する。
評価の方法：自己評価、他者評価、教員評価を行う。
評価の工夫：①生徒は、事前に評価基準を理解して、書く活動に取り組んだ。
②本単元は、「読む力」を育成する単元のため、自己評価と他者評価にあたっては、以下の点に留意するよう促した。
・基本的な文章の書き方については評価に含めない。
・各意味段落の内容を説明した上で、それらの内容を「問題提起」「根拠の明示」「問題解決策の提示」等の表現で言い換えているかを確認する。

Ⅵ. 授業者より今後に向けて

「書くこと」の指導において、ICTを活用する場合、次のような効果と可能性が考えられます。

・加除訂正や文章の入れ替え、推敲がしやすいので、書くという行為そのものへの抵抗感を減らせる。
・生徒が書いたものを共有しやすく、他者の考えと比較しながら、自らの考えを深めることができる。
・注目させたい内容を映写して全体に示すことができる。
・生徒の記述や作文に教師がコメントする際、手書きに比べて時間の短縮が図れる。

以上のことを踏まえ、「書くこと」の指導において、ICTを積極的に活用した実践を模索していきます。

１人１台端末と電子黒板

現在は全教員参加の研修会を行うなど、活用の準備が進んでいます。教科によっては理解度確認の小テストや意見の共有、話合い活動においてICTの活用が始まっています。

過去の調査研究との関連

深い学びの鍵となる「見方・考え方」についてまとめました。
令和2（2020）年3月発行

授業改善のポイントとして、教師からの「問いの工夫」に焦点を当てました。
令和3(2021)年3月発行

栃木県総合教育センター
令和4（2022）年3月　発行
〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070
TEL 028-665-7204（研究調査部）
http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/